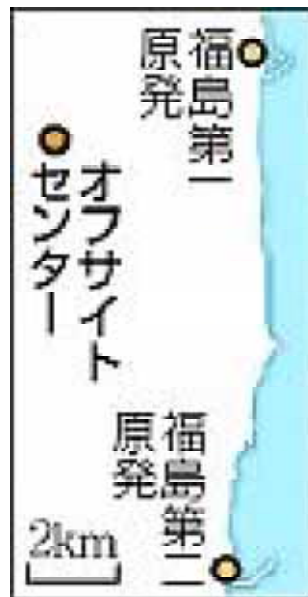


福島第一原発には大熊町にオフサイトセンタ - として「福島県原子力災害対策センタ - 」が設置されており、第一原発からは離れた所（約 5km）にありましたから、津波の被害は受けておりません。

場所は常磐線大野駅近くで旧 6 号国道の信号機のある十字路を山側に一寸入ったところにあり、下図のような建物です。



このシステムは、事故現場である第一原発からのデ - タのモニタ - がオフサイトセンタ - が設置されており、ここが集めたデ - タを東京・文京区にある文部科学省管轄の施設である中央コンピュ - タ - システムに送り込まれ、気象庁による現地の気象情報予測・風向・風速が加味され、分析が行われるスピ - ディシステムで、文字と通り「SPEEDI」に配信できるシステムのはずでした。

が、肝心の福島県原子力災害対策センタ - が地震により外部電源が断線、停電になったが、非常用電源機関が 1 時間ほど作動したが、これまた停止してしまい、非常用発電機関の故障箇所が判らず、しばらくの間停止、電話回線その他も断線です。

従って、第一原発の事故では、事故発生当初から、放出源情報を原子炉施設における測定や、測定に基づく予測計算によって求めることができない状況が続いた。

このため、大気中の放射性物質の濃度や空間線量率の変化を定量的に予測するという本来の機能を活用することが出来なかった。

(SPEEDI の運用は、文部科学省により原子力安全委員会事務局の執務室に派遣されている(財)原子力安全技術センタ - のオペレ - タ - によって行われている。)

SPEEDI を用いて発電所周辺の放射性物質の濃度や空間線量率の値を計算できない状態なので、原子力安全委員会では、この SPEEDI を開発した日本原子力研究開発機構の研究者の協力を得て、原子炉施設周辺での測定に替わる方法を検討し、試行錯誤を繰り返して、環境中の放射性物質濃度の測定(ダストサンプリング)結果と原発から測定点までの SPEEDI による拡散シミュレ - ションを組み合わせることによって、ダストサンプリングによって捉えられた放射性物質が放出された時刻における放出源情報を一定の信頼性を